東方オリジナル小説～幻想入りシリーズ～

黒翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方オリジナル小説～幻想入りシリーズ～

【Ｎコード】
Ｎ８３８３Ｙ

【作者名】
黒翼

【あらすじ】
作者は完全に初心者です
ピクシブにも投稿しております

第1章　幻想入り（前書き）

初めに

この作品に登場するキャラクターは作者の主観を尊重しており、原作とのキャラ崩壊が多々あるかもしれません。

二次創作やキャラ崩壊が苦手な方は読む事を勧めません。

この作品によってご自身の幻想郷のイメージが崩れても作者は責任をとれません。

人の数だけ幻想郷が存在します。他の作家さんなどの幻想郷と比較するのは迷惑になるので控えましょう。

あと、作者は初心者なので誤変換や脱字などがあるかもしれません。どうか生暖かい目で見守ってください。

二次創作、キャラ崩壊、誤字脱字が許容できる勇者のような読者様は大歓迎です。

「お前の作品のせいで俺の幻想郷のイメージが崩れただろ！お詫びに霊夢たんのエロ小説を書け！はぁはぁ」とか言う人はお帰りください。

では最後に…

あなたの心に幻想郷

第1章　幻想入り

朝、目が覚めたら知らないところだった。見慣れた部屋の天井ではなく、緑の生い茂る美しい所だ。はて？俺は何故こんなところにいるのだろう？まさか夢遊病？俺が考えていたら鳥たちの鳴き声が聞える。美しい音でチンチンと…ってチンチン！？あれ！？鳥の鳴き声ってこんなんだっけ！？確かチチチ…とかチュンチュンって感じじゃ・・・？

男混乱中…

気になって変な泣き声がする方を見ると、いるのは変な格好をした女性だった。女性は数羽の鳥と楽しそうに鳴くと背中の翼で飛び立った。え！？翼！？飛ぶ！？

「…ははは…これは夢だな。よし、寝よう。寝たらいつもと同じ俺の部屋が待っている」

俺はそう結論付けるとその場で横になり、目を閉じる。ああ、だんだん意識が薄れていく。眠る予兆だ。（※この男は東方永夜抄を未プレイの為、ミスティアをしりません。先ほどの女性はミスティア・ローレライです。）

男睡眠中…

男が眠ってから少しすると、白黒の少女がこちらに歩いてきた。

「今日も大量だぜ♪…ん？」

白黒の少女…正確には黒い服に白いエプロンをつけ、白いヒラヒラのフリルのついた黒のトンガリ帽子をかぶった少女、霧雨魔理沙は男に気づき、近寄ってくる。

「おーい、お前。天気がいいからってこんな所で昼寝してたら妖怪に襲われるぜ？」

魔理沙は持っていたキノコが大量に入っていた袋を地面に置くと、男の肩を揺さぶる。

「う～ん…あと5…」

（！？まさかあの幻のあと5分発言だぜ！？）
男の寝言に魔理沙は思わず固唾を飲み込む。
「あと…5年…」
「ってそんなに待てるかっ！」
魔理沙は思わず箒で男の頭を思い切り叩いてしまった。男は目をグルグルにし、気絶したようだ。
「しまったぜ…。このままにしておく訳にはいかないから、とりあえず霊夢の所にでも連れ行くぜ」
魔理沙は男の体に縄をぐるぐるに巻きつけると、箒にぶら下げ飛行した。これが魔理沙風運搬術なのだが、男の頭が下なので頭に血が上ったりして少し危険だ。

少女移動中…

目を覚ますと知らない部屋だった。男が辺りを見渡す。すると、隣の部屋から話し声が聞えてきた。
「全く、魔理沙。何を考えてるのよ」
「す、すまん。だが悪いのはあの馬鹿だぜ？」
何やら女の子2人が話をしているようだ。
「……」
俺は障子を開けると何やら揉めている2人に話かける。暗い部屋じゃわからなかったが、男の頭には包帯が巻いてある。
「ここは？」
「ここは博麗神社よ。もう起きて平気なの？」
「大丈夫だ」
赤と白の巫女服を着た女の子、博麗霊夢が答えてくれた。
「私の名前は博麗霊夢よ。ここの神社で巫女をしているわ」
「私は霧雨魔理沙だぜ、よろしくな…えーと…」
「俺の名前は神崎昴（すばる）だ、よろしく」
男、昴軽く頭を下げる。
「あなたは外の世界から来た人よね？」
「ああ、ここは幻想郷だよな」

「あら、ここの事をしっているの？」
霊夢が少し驚く。外の世界から来る人は最近増えているが、ここの事を知っている人は珍しいからだ。その理由は隙間妖怪と言われる八雲紫が幻想郷の知識のある人間を幻想入りさせることが少ないからだ。
「ああ。それより脇巫女とだぜは何の話をしてたんだ？」
「霊夢よ！」
「魔理沙だぜ！」

少女説明中…

「なるほど。頭が痛いと思ったらそういうことだったのか…」
「謝るぜ」
霊夢と魔理沙の説明によると、寝ている（気絶している）俺を運ぶ途中に？に氷を投げられ、俺を吊っていた縄に当たり縄が切れて、俺は空中から落ちたらしい。しかも落ちたのが丁度、紅魔館の上で、紅魔館の人たち（？）に迷惑をかけたようだ。
「それで、どうするの？」
「何が？」
「もといた世界に帰るのか幻想郷に残るのか、よ」
霊夢の言葉に俺は驚いた。
「そんな簡単に帰るのか？」
「ええ。私はいろいろ用意しないといけないけど、貴方自体は真直ぐ歩いていたら帰れるわよ。まあ、一度帰ったらもう会えないでしょうが」
「……」
俺は考えた。心配している人がいるかもしれない。けど…

「なあ、神崎～。お前いつ死ぬの？」
「学校くんなよ、うざいんだよ化物」
「てか死ねよ、気持ち悪い」
クラスの奴らからの言葉…。

「では、次。神崎、読んでみろ」
開けると『化物』『死ね』『死ね』と書かれ、破けたり踏まれた痕がある教科書。
「…読めません」
「ちっ。なんでこんな簡単な文章が読めない。なんの為に来ている？」
教師からの言葉…。
「なんであなたなんか生まれてきたの！」
親からの言葉…。
浴びせられる罵倒。
理不尽に受ける暴力。
一瞬で流れる俺の記憶。
このまま、帰らないほうがみんな幸せなんじゃないか？

「どうしたの？」
「いや、なんでもない」
霊夢の言葉に思考を切り替える。
「本当に大丈夫？なんか顔色悪いわよ」
霊夢が覗き込む形で俺を見ていた。魔理沙も心配そうにしている。
「ああ、問題ない。それより決まった」
「え？」
「…残るよ、ここに」

少女思考中…

第1章　幻想入り2

「……」

霊夢は昴の瞳を見つめる。霊夢は今までにいろんな者たちを見てきた。さまざまな人間、さまざまな妖精、いろいろな種類の妖怪。職業の関係もあり、時には戦い、時には助け合った。しかし、霊夢は昴の考えが読めない。しかし、その憂いを秘めた瞳は興味本意などでは無い気がした。

「…ふぅ。貴方の気持ちはだいたいわかったわ。今日だけ泊めてあげるから、明日になったら自分で宿を探しなさい」

「いいのか？」

俺は霊夢の予想外の言葉に少し驚いた。幻想郷にとっては厄介者でしかないかもしれない俺が留まる事を許してくれた。それもあるが…1人暮らしの女の子の家に泊まっていいだと！？これ何てエロゲ？

「話はきまったようだな！なら昴、さっそく弾幕ごっこしようぜ！」

「いやいや、俺弾幕撃てないから…」

「大丈夫だぜ！こんな時は香霖堂に行けばいいんだぜ。そうと決まれば早速いこうぜ！」

魔理沙はそう言うと、俺の腕を掴んで飛び出した。

「遅くなる前に帰ってきなさいよ」

霊夢は呆れながらそう言うと、お茶を飲み始めた。

少女・男移動中…

「おーい…待てよ」

「遅いぜ！」

魔理沙は箒で空を飛んで、上空から指示を出している。無論俺は走っていた。

茂みがガサガサとなり、目を向けるとかわいい女の子が出てきた。

女の子は頭に赤いリボンをつけ、黒を基準とした服を着た女の子だ。しかし、服などはボロボロになっていて痛々しい。
「おい、どうした？大丈夫か」
「・・・・・・・た…」
「…何だって？」
「…減った…お腹減った」
「え？」
そこで俺は寒気を感じた。
「あなたは食べてもいい人間？」
そこで俺は理解した。ここは今までの世界じゃないのだと。ここは…幻想郷なのだと。
「魔符…スターダストレヴァリエ！」
少女が俺に襲い掛かる寸前、俺は星の輝きを見た。
「大丈夫か？だぜ」
砂煙の中から魔理沙が出てきた。帽子を手で押さえながら、笑う。
「今のは…スペルカード？」
「ああ、そうだぜ。しかし早速あいつに会うとは運がわるいな、お前。いや？私と一緒だから運がいいのか？」
「そーなのかー。食事の邪魔をするのかー」
女の子は赤い瞳で魔理沙を睨む。すると、当たりが急に光を失った。闇…光を通さない完全な闇。
「夜符…ナイトバード」
相手がスペルカードを使う音がする。すると、大量の羽ばたき音聞えてきた。
「私にそんなの効かないぜ！恋符マスタースパーク！」
「！？」
すると、大きなエネルギー波が鳥ごと女の子を襲う。エネルギーの光は鳥を飲み込み、少女をも飲み込んだ。すると、闇は薄れていき当たりがはっきりと見えるようになった。そして魔理沙の前には先ほどの女の子が倒れている。

「私に勝とうなんて百万年はやいぜ！」
女の子は震えながら立とうとするが、地面に吸い寄せられるように倒れる。
「…大丈夫か？」
「おい、今ルーミアに近づくと危ないぜ。離れているほうがいいぜ」
俺は魔理沙の言葉に従わず、ルーミアと呼ばれた少女に近づく。すると、ルーミアは地面に這い蹲りながら睨んできたが、俺は気にせずにルーミアを介抱する。
「…なんのつもりだ」
よく見るとトレードマークのリボンが外れて、魔力が噴出している。
「おい！マジで危ないぜ！」
魔理沙はルーミアの魔力に気づいたようだ。ＥＸ化。強すぎて封じられた力が漏れ出しているのだ。
「情けのつもりか？人間（食料）の分際で調子にのるなよ？今ここで貴様の腸を引きずりだしてやろうか？それとも貴様の頭をトマトのように捻り潰してやろうか」
ルーミアが睨みながら言うが俺は気にせずにポケットに入っていた包帯でルーミアの傷口を塞いでいく。マスタースパークが直撃したその体は傷が多く、手持ちの包帯じゃ足りない。
「おい、聞いているのか人間？」
「少し黙っていろ」
俺はポケットからハンカチを取り出し、傷口に巻いた。何故か今の俺に恐怖心はなかった。魔理沙はルーミアの強大な魔力に当てられたのか、腰を抜かしている。
「…これで大丈夫だろ」
俺は近くに落ちていたルーミアのリボンを拾うと、砂埃を払い手渡す。ルーミアはリボンと昂を交互に見ると、受け取り立ち上がった。魔理沙を睨む。魔理沙は理解した、今のルーミアには勝てないと。

「今回は見逃してやる」
ルーミアはそう言うと歩きだそうとする。
「あ、少し待て」
俺が引き止めるとルーミアは俺を睨む。
「…なんだ、今ここで殺して欲しいのか？」
「いや、確か腹減ったとか言っていただろ」
俺はそう言うと、懐からある物を取り出し、ルーミアに渡す。
「この借りは必ず返す…！」
そういい、ルーミアは今度こそ去っていった。最後、その頬に赤くなっていたのは俺の気のせいだろう。

（なんだ、あいつは。あんな人間がいるのか？人間は妖怪に恐怖し恐れおののく存在だ。あんな人間見た事ない）
ルーミアは１人魔法の森を歩いていた。
（さっきからのこの気持ちは何なのだ！なぜ頬が熱くなる！なぜあの男の事がこんなに気になる！相手は人間だぞ！食料だぞ！？）
ルーミアは先ほどあの男から貰った物を見る。なにやら食べ物のようだ。封を切り、中に入っていたものを一枚取り出し口に入れると、つい頬が緩んでしまった。
「…美味しい」

「大丈夫か、魔理沙」
俺は腰を抜かしている魔理沙に近づくと、手を差し伸べる。
「ああ、すまないぜ」
魔理沙は俺の手を掴むと一気に立ち上がる。
「…しかし、あのルーミアの魔力…下手したらフランくらいあるぜ」
「フランクフルト？」

第1章　幻想入り3

「フランだぜ。フランドール・スカーレット。紅魔館の主、レミリア・スカーレットの妹だぜ」
「ああ、おぜう様と妹様か」
俺は納得した。なるほど、元の世界でどんだけやっても会えなかったフランちゃんにこっちでは会えるかもしれないのか。
「そういえば昂」
「ん？」
「最後にルーミアに渡したのはなんなんだ？」
「ああ、ビーフジャーキー」
「…なんでそんなの持っているんだぜ？」
「なんか知らんが入っていた。さっき気づいたんだが、いろいろポケットに入っていたんだ」
「お前を幻想郷に連れてきた奴のせいじゃないか？」
魔理沙は俺のポケットに興味心身のようだがスルーしよう。こいつに取られたらもう帰ってこないからな。
「俺を幻想郷に連れてきたのは隙間妖怪じゃないのか？」
「ん～、霊夢が言うには違うみたいだぜ。お、香霖堂に着いたみたいだぜ」

そこには香霖堂と書かれた店があった。
「おーい、香霖」
魔理沙は店のドアを開けると勝手に入っていく。俺もその痕に続いた。
「いらっしゃい魔理沙に…えーと」
「こいつは昂だぜ」
店のカウンターには1人の男性が座っている。色白に眼鏡をかけた男性だ。片手には本を持っている。

「僕は森近霖之助だ。よろしく」
「始めまして、神崎昴です」
「ウホッ、いい男。一発や　ら　な　い　か？」
俺は寒気を感じた。ルーミアと始めたあった時とは違う恐怖…。
このような悪寒は始めてだ。霖之助は服を脱ぎ捨て、近寄ってくる。
服の上からでは解らなかったが、霖之助の体は意外と筋肉が付いていて逞しい。俺は後ずさる。その時！霖之助に電流はしる！
「森近さん、初対面の方を怖がらしてはいけませんよ？」
声がした方を向くと、派手は服を着た女性が鏡の前で片手は腰にもう片手は人差指を立ててうでを上はビシッと上げてポーズを取っている。
「キャーイクサーン」
俺は思わず言ってしまった。
「お前は確か竜宮の使いの…」
「はい、永江衣玖と申します」
衣玖は此方を振り向くと、軽く会釈する。
「お前がいるって事はまた地震か？」
「いいえ、今回は違いますよ。天界には鏡が無いのでここに見に来ただけです」
衣玖はそうにっこり返した。霖之助は衣玖の電流を浴びて床に平伏し、プスプスと音を立てている。
「なるほど。じゃ、いいや。香霖」
「…なに？」
「弾幕ごっこに使えるアイテムあるか？」
魔理沙は霖之助と話を始める。衣玖さんは鏡の前でフィーバー（先ほどのポーズ）に戻ってしまった。
「こんにちは～」
俺が暇を持て余していると、店のドアが開く。客が来たようだ。
入って来た女の子は赤と青のオッドアイで持っている大きな紫傘が印象的だ。傘には大きな目があり、舌がついている。多分妖怪だろ

う。俺は入って来た女の子と目が合った。
（あ、人間だ）
女の子は俺を見て固まった。
（お、驚かさなきゃ…！）
「う、うらめしや～」
女の子は俺の前まで来ると、精一杯作った怖い顔を見せる。ぶっちゃけ全く怖くない。むしろ微笑ましいというか可愛い。けど、こういう場合驚いたほうがいいのかな。
「わ、わあ。驚いたな…（棒読み）」
（驚いてくれた！？）
女の子は俺を見て驚いた表情をする。…あれ、俺反応間違えた？
しかし、女の子は次第に嬉しそうな顔になる。
「わーい、驚いてくれた！最近誰も驚いてくれないもん」
「よ、よかったね…」
「わちき、多々良小傘。よろしくね♪」
小傘は嬉しそうに自己紹介する。
「俺は神崎昴。よろしく」
「うん♪」
小傘はにっこりと笑って俺にくっついて来た。は、反応に困る。
「…それより、ここに用があったんじゃ？」
「あ、そうだった」
小傘は俺の袖を引っ張る。
「お、おい」
「ついてきて♪」
あんな棒読みの驚き方で気に入られてしまったらしい。なんか罪悪感。
「香霖さーん。例のアレ直った？」
小傘は魔理沙と香霖の近くに行くと香霖に話かける。
「ん？ああ、もう直っているよ」
霖之助はこちらを向かずに棚を漁りながら言う。

「…アレって？」
「捨てられていた傘だよ」
俺が聞くと、小傘が答えてくれた。
「…わちきはもともと忘れられた傘の妖怪だから、捨てられた傘とかを放っておけないの…」
俺が不思議そうにしていたら、小傘は少し寂しそうに教えてくれた。
「…えっ？」
俺は思わず小傘の頭を撫でていた。気づいたら体が勝手にうごいていたのだ。
「…くすぐったいよ♪」
小傘は気持ちよさそうに、そして嬉しそうに言う。なんだか子猫みたいだ。
「おやおや。知らない間にずいぶんと仲良くなったみたいだね」
霖之助が店の奥から傘を持って来た。
「あと魔理沙。弾幕ごっこに使えそうなアイテムは今はないようだよ」
「そうか」
霖之助の言葉に魔理沙は少し残念そうにする。
「昴は弾幕撃てる道具を探しているの？」
「いや、俺じゃなく魔理沙が、な」
小傘の言葉に俺は素直に返す。ぶっちゃけ俺はそんなアイテムいらない。
「探しているのは昴のだぜ。要らなそうにしているが、武器が無かったら危ないぜ？またルーミアみたいなのが襲ってこないと言う保障はないぜ」
…確かに魔理沙の言うとおり、確かに武器は必要かもしれない。何も出来ずに殺されるより、弾幕ごっこに持ち込んだほうがよいだろう。弾幕ごっこなら命まではとられないだろうし、この幻想郷で暮らすなら必要かもしれない…。

「……」
そういえばポケットに何かいろんな物が入っていたな。ほとんどは元の世界にもあったものだか数個よく解らない物も入っていた。
アレはもしかして…。
「霖之助さん、これが何か解りますか？」

第1章　幻想入り4

「む…。これは…」
俺はポケットから刀の柄の様な物を取り出し、霖之助に見せる。
それの見た目は刀なのだが、刀身が無く柄と鍔だけだ。霖之助は真剣な目でそれを見ると、頷く。
「これは弾幕を撃つ道具だろうね」
「…やはり」
霖之助の言葉は大体予想できていた。上手く言えないが、それを触った時になんとなくイメージできたのだ。
「これを何処で？」
霖之助の言葉に俺は首を振る。
「わかりません。気づいたら俺が持っていたんです」
俺がそう言うと、霖之助は少し考えこちらを見る。
「…なるほど。使い方は解るかい？」
「おおよそは。細かくはまだ…」
「うん、わかった。まあ初めはそうだろう。大切に使いなさい」
「…はい」
俺と霖之助が話していると、魔理沙と小傘はよく解らない顔をしていた。
「いったい何の話だぜ？わかるように説明して欲しいぜ」
魔理沙は困惑した顔で話しかけてきた。小傘も横で頷いている。
「つまり、これは昴くんの専用アイテムだと言う事さ。君も弾幕アイテムを始めて持った時に何かを感じたろう？小傘くんも誰にも言われずとも弾幕を撃てただろう？こういうのは言葉じゃ言いにくいけど、だいたい解るものなんだよ」
「余計にこんがらがってきたぜ…」
霖之助の説明に魔理沙が目を回す。しかし、大雑把には理解したようだ。

「弾幕が撃てる事が解ったんだからさっさと帰ろうぜ！暗くなる前に帰らないと霊夢が心配するぜ」
魔理沙はそう言うとさっさと香霖堂を出て行った。
「それじゃあ小傘、霖之助さんまたな」
俺はそう言うと魔理沙を追って外に出た。後ろから小傘の「またね～♪」と霖之助の「また来てね」と言う声が聞こえたので軽く手を振った。

少女・男移動中…

「博麗神社についたぜ」
神社についたら、魔理沙が腕を伸ばしながら言う。
「じゃあさっそく…」
「じゃあさっそく弾幕ごっこだぜ」
「…え？」
霊夢に報告に…と言おうとした瞬間、魔理沙が元気よくそんな事を言うので、おもわずまぬけな声をだしてしまった。
「え？じゃないぜ。せっかく弾幕アイテムを持っているんだから弾幕ごっこだぜ！」
そういうと、魔理沙は懐から八角形の小さな物体を取り出し構える。いわゆる八卦炉だ。
「…しょうがないな」
俺は溜息を吐き、刀の柄を構える。意識を集中すると、青白い炎の様な刀身が浮び上がる。その様子に驚くことなく、八相の構えをとる。攻撃と守りを兼ね備えた剣術の基本ともいえる構えだ。
「…じゃあルール確認だぜ。スペルカードの枚数は3枚でいいな？」
「…問題ない」
俺はポケットを漁り、スペルカードを確認し、3枚選ぶ。初めて見るはずなのに、何故かどのようなものか理解できた。
「では始めるぜ」
俺が頷くと、魔理沙はニッと笑うと上空に跳ぶ。

「さっそく行かしてもらうぜ！魔符スターダスト！」
魔理沙がスペルカードを構え投げると、大量の星屑が降ってくる。
「しょっぱなからスペカかよ！？」
「手加減なしだぜ！」
俺は避けながら、刀で自分に当たる最小限の星屑だけを打ち落とす。
「やるな」
魔理沙は額の汗を拭く。昂はスペルカード攻撃を剣術だけで全て避けたのだ。そして刀を構えたままこちらに跳んでくる。
「…やあ！」
魔理沙に向かって刀を振り下ろす。魔理沙は回避して通常の弾幕攻撃をしてくるが刀で全て防ぐ。そうして魔理沙の側まで走って、蹴りを食らわすが、腕でガードされる。魔理沙は後ろに跳びながら弾幕を撃ってくるが、避けながら魔理沙を追ってはしる。肩や横腹に少し掠ったが、あまり問題ではない。致命傷になる箇所は全て避け、あるいは刀で打ち消している。
（おいおい、こいつ本当に初心者か…？）
魔理沙は昂の攻撃を避けながら考える。昂は離れた位置から刀を振る。そうしたら青白い火球のような物が魔理沙に向かって飛ぶ。弾幕攻撃だ。
「…ちぃ！」
魔理沙は弾幕を撃ち、昂の弾幕と相殺させる。向かってくる昂に魔理沙はスペルカードを構える。
「恋符マスタースパーク！」
魔理沙がそう叫ぶと、極太のレーザーが放たれる。あれはルーミア戦で見ているし、その破壊力、起動は覚えていた。昂はポケットからスペルカードを取り出す。
「無符クリアソード！」
昂がそう叫ぶと青白い巨大な大剣の様な弾幕が現れ、魔理沙のマスタースパークとぶつかり爆発が起こり、大量の砂煙が襲う。

「こほこほ…やったか…？」
片目を閉じながら魔理沙が爆発した痕の砂煙の中を見ていると、急に砂煙が割れた。
「！？」
砂煙が割れ、中から昂が走ってきていたのだ。昂は2人のスペカがぶつかった瞬間、もうその中に走っていたのだ。そして爆風を背に一気に魔理沙との間合いを詰めた。
「しまったぜ…！」
魔理沙が諦め目を閉じたが、いくら待っても攻撃が来ない。不思議に思い、目を開けると昂が倒れていた。魔理沙も腰が抜けて倒れてしまった。
「ハハハ…大丈夫か？」
魔理沙が笑いながら昂に話かけるが、ピクリとも動かず反応がない。
「お、おい？」
「スー…スー…」
昂は寝息をたてて寝ていたのだ。そして遠くから霊夢が走ってくるのが見える。
「わたしも少し疲れたぜ…」
魔理沙はそう言い、横になった。

第1章　幻想入り４（後書き）

これで第一章幻想入りは終了です。
どうだったでしょうか？
主人公が強い？
仕様です。
ルーミアがＥＸ化？
仕様です。
霖之助がガチホモ？
仕様です。

第2章　仕事（前書き）

とうとう始まりました。第2章！
え？
誰も待ってない？
ですよねーｗｗｗ

第2章　仕事

目が覚めたら、そこは一度見た景色だった。博麗神社の一室。そして、またしても隣の部屋から話し声が聞こえる。この声は霊夢と魔理沙だろう。俺は布団から出ると、隣の部屋に続く障子を開く。すると4つの瞳がこちらに向く。霊夢と魔理沙の目だ。

「あら、起こしちゃった？」

「寝てないとダメだぜ」

霊夢と魔理沙が俺を心配そうに見る。

「…何があったんだ？魔理沙と弾幕ごっこをしている時までは覚えてるんだが、そのあとの記憶があいまいなんだが」

俺は霊夢を、そして魔理沙を見ながら言う。魔理沙のマスタースパークをこっちもスペカで対抗し、相殺させたところまでは記憶にある。しかし…

「貴方、弾幕ごっこ禁止よ」

「…え？」

弾幕ごっこ禁止？なんでいきなり。

「倒れたのよ。生きる源である生命力を使い過ぎてね」

「生命力を…？」

「そう。普通、弾幕は霊力、魔力、妖力などを弾として打ち出すの。けど貴方が打ち出す弾は生命力なのよ」

霊夢が深刻そうに説明する。隣で魔理沙もバツが悪そうに頭をボリボリ掻いている。

「…なんで、生命力を？」

「知らないわよ。けど腕の確かな医者の言う事だし、貴方の生命力が弱まっていたのも確かね」

腕の確かな医者？永琳だよな…一体いつの間に…。ちなみに永琳とは迷いの竹藪の奥地に住む腕利きの名医だ。

「覚えてない？貴方、二日間眠り続けていたのよ」

「二日間も？」
「ああ、そうだぜ。すまないぜ、私が弾幕ごっこなんて言い出したばっかりに…」
魔理沙が頭を下げる。魔理沙らくしない姿を見て、俺は少し面食らう。
「気にするな」
俺は魔理沙の頭に手をポンと乗せる。
「だが…」
「それより腹が減った。霊夢、なんかないか？」
魔理沙が何か言いかけたが言葉を切って霊夢に聞く。
「簡単なものなら用意できるわ。まあ生命力を回復するのに食事はいいわ」
そう言い、霊夢が台所に向かう。
「私も手伝うぜ！」
魔理沙もそう言い、霊夢の後を追いかける。
「じゃあ、俺も…」
『病人は休んでなさい（るんだぜ）！』
霊夢と魔理沙にそう言われて俺は諦め、卓袱台の肘をつき小さく溜息を吐く。
「…はぁ」

少女たち料理中…

霊夢と魔理沙が運んできた料理は純和食だった。ごはんに味噌汁、鯖の切り身にほうれん草のお浸しなど、とても美味しそうな料理だった。見ただけで涎が出てしまいそうだ。
「いただきまーす！美味い！」
「そんな慌てて食べなくても、おかわりも沢山あるし落ち着いて食べなさい」
「美味いだろ、私も手伝ったんだぜ」
「…ほとんど邪魔をしていただけでしょ」

魔理沙の言葉に霊夢は溜息を吐きながら言う。
「大変だったわよ、鯖に砂糖をかけようとしたり…」
「あれは間違っただけだぜ！」
霊夢の言葉に魔理沙が慌てて弁解する。そんな楽しい食事を終え、しばらく雑談していると不意に霊夢が聞いてきた。
「それで、どうするの？」
「ん、何が？」
「宿よ。寝込んでいたから二日も泊めてあげたけど、もともと一日の約束よ？今日はもう晩いから特別に泊めてあげるけど」
霊夢の問いに考える。霊夢にはいろいろ迷惑をかけてしまったから、これ以上は甘えだろう。
「…そうだな。明日になったら住み込みで働ける所でも探してみるよ」
「もし当てが無かったら私の家にくるといいぜ」
俺が考えていたら魔理沙がそんな提案をしてきた。
「いや、遠慮しておこう」
「即答だぜ！？」
だって…あれじゃん…。魔理沙の家ってとても散らかっているイメージあるし、料理も苦手みたいだし、まず色んな所に引っ張られて行きそう…。
「うん、いい判断だわ…」
「霊夢もひどいぜ！」
霊夢が頷いていると、魔理沙が泣きそうな顔で突っ込んでくる。
「だって前魔理沙の家に行った時、パンツにキｎ」
「それは言ったらダメだぜー！！」
なんか聞いちゃいけない事が聞こえた気がするが、きっと気のせいだ。うん。
「まあ、それならいい所に話をつけといてあげるわ」
暴れる魔理沙を制しながら霊夢がそんな提案をしてくる。
「いい所？」

「ええ、なんでも今人手が足りていないみたいだし、部屋も沢山あるから住み込みで働けるでしょう」
「へぇ～。そんな所が幻想郷に在るとは…。けど良いのか？」
「それくらい別にいいわよ」
　またしても霊夢に迷惑をかけてしまったな。それにしても、住み込みで働ける所ってどこだろう？永遠亭かな？それとも白玉楼？地霊殿や紅魔館だったら死亡フラｇ…
「じゃあ、館の主であるレミリアに話をつけておくから。今日はもう寝なさい」
「……？今なんて？」
　あれ？聞き間違いかな？
「今日はもう寝なさい？」
「その前！」
「魔理沙のパンｔ」
「うわぁぁぁああ！」
「戻り過ぎ！」
「レミリアに話をつけておく？」
「そこ！」
　はぁはぁと肩で息をする。霊夢は面白がっていたみたいだが…。
「紅魔館で働く事に何かあるの？」
「何かあるの？じゃなく死亡フラグビンビンじゃないか！」
「まあ、大丈夫でしょ…多分。もう早く寝なさい。明日には出て行ってもらうんだから」
「…うぐぅ」
　少々納得できないけど、霊夢には逆らえない。それに住み込みで働ける所を自分で探すより、確実だ。博麗の巫女の口添えがあるのは強い。それに、紅魔館に行ったからっていきなりフランに出会って死亡はないだろう…。うん…。ないよな？俺はそう結論付けると、隣の部屋にひいてあるさっきまで俺が寝ていた布団に入る。まだ疲れていたのか、布団に入ったら急激に眠気が襲ってきて、次第に意

識が薄れていく。
「…本当に……なのか…？」
「ええ、彼なら……を……できるでしょ…」
「確証は……るのか？」
「……は巫女の勘よ」
薄れいく意識の中で何かを聞いた気がしたが、それが何かわからなかった。

男睡眠中…

第2章　仕事2（前書き）

※注意
今回はジョジョネタパロディが入っています。
嫌いな人は飛ばしても特に問題はありません。

第2章　仕事2

朝、俺は小鳥のさえずりで目を覚ます。上半身は起こし、腕を真上に伸ばしながら小さく欠伸をする。布団から出て、軽く体を解す。昨夜はだるかった体も、一晩寝たら快調だった。俺は時計を見ると、まだ朝の六時前だった。

「…顔でも洗うか」

俺は外に出る。この神社には水道が無く、近くにある井戸まで行かないと水が無いのだ。俺は井戸にくくり付けてある桶を井戸の中に垂らす。

「…ん？やけに重いような…」

桶を釣り上げようと力をいれ、持ち上げる。すると…桶の中には水ではなく、少女が入っていた。

話しかける前に言っておく！

俺は今ほんのちょっぴりだが体験した

い…いや…体験したというよりはまったく理解を超えていたのだが…

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺は井戸で水を掬っていたと思ったらいつのまにか女の子を掬っていた』

な…何を言っているのかわからねーと思うが俺も何が起こったのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

幻だとか夢だとかそんなチャチなものじゃあ断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

と、俺がジョ〇ョの奇妙な冒険のポル〇レフの格好をしながら語っていると、女の子がジッと見つめてくる。女の子は綺麗な緑色の髪をツインテールにし、白い和服みたいな服（死に装束？）を着ており、内気な感じの子だ。

「えーと…始めまして。神崎昂です。…君は？」

「……キスメ」
キスメと名乗った女の子は顔を真っ赤にして、顔を桶に隠してしまう。なんか顔を洗う前に目が覚めてしまった。
「…キスメは博麗神社に用があるのか？」
俺がそう尋ねると、キスメは顔を少し見せるとコクリと頷いた。俺が神社に向けて歩きだそうとしたが、キスメは俺から顔を半分だけだし、こちらをジーと見てくる。
「…えーと…桶から出てこないのか？」
キスメはコクリと頷く。
「…神社に行かないのか？」
キスメは顔をブンブンと横に振る。俺は小さく溜息をすると、桶と井戸が繋がっている紐を解いて、桶の取手の部分を掴むと持ち上げる。キスメは初め驚いたような表情をしたが、特に抵抗はなかった。俺はキスメが入った桶を持って神社へと戻った。

男移動中…

霊夢とキスメはなにやら話しをして、地底へ向かったらしい。魔理沙は朝食を食べたら帰っていった。俺は霊夢に書いてもらった紅魔館に続く地図と紹介状を手に1人で博麗神社を出る。本当は魔理沙に道案内してもらう筈だったのだが、魔理沙は用事があるとかでさっさと帰ってしまった。霊夢いわく、朝は人を襲う妖怪はほとんど活動していないらしく、一人でも平気だそうだ。
「ふう…行くか」
俺は博麗神社の前の石段を降り、まずは人里に向かった。

人里まで特に問題なく到着し、辺りを見渡す。
人里は活気に溢れており、日本の江戸の町の様な雰囲気だ。見た感じ、人里には男性もいるようだ。神社から結構な距離があったから少し小腹が空き、俺は何か食べれる所がないか辺りを見渡す。すると茶屋を発見した。茶屋とは時代劇などによく登場する店だ。
「…そういえば金がないな」

今思い出したが、俺は金を持っていなかった。しかし店から漂う美味そうな団子の匂い。
「どうしたんだ？」
俺が茶屋の前で考え事をしていたら、誰かが話しかけてきた。そちらを向くと、青い髪で特徴的な帽子をかぶった女性だった。
「始めてみる顔だな。私は上白沢慧音という者だ。普段は寺子屋で町の子供たちに勉強を教えている」
「あ、はじめまして。神崎昂です。えーと…別の世界から来た者です…」
「なるほど、外来人か。困った事も多いだろう。私でよければ助けになるぞ？」
慧音がそう言う。いい人だ。しかし、小腹が減ったとは流石に言えないな。
「特に困った事は…」グゥー
俺がそう言いかけた時、腹の虫が大きな音を上げる。は、恥ずかしい。
「はっはっは。なるほど腹が減っているのか。じゃあとりあえず、そこの茶屋に入るか」
慧音は面白そうに笑うと俺の肩を叩き茶屋に入る。

男女移動中…

「なるほどそんな事があったのか」
俺は慧音にお茶と団子を奢ってもらい、今までの事情を話す。
「まあ、紅魔館で働く事になったら大変だろう。困った事があったら私を尋ねて来い。微力ながら助けになる」
「…ありがとう」
俺は慧音に頭を下げる。お茶を奢ってもらったり、話を聞いてもらったり、会って間もないのに、もういろいろ助けてもらっている。
俺と慧音は茶屋を出る。
「紅魔館ならこの道を進むといい」
「いろいろありがとうな」

「気にするな。持ちつ持たれつだ」
慧音はそう言い、去っていく。かっこいいな。
「よし！紅魔館に向かうか！」
俺は気合を入れなおし、紅魔館に向かう。

男移動中…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8383y/

東方オリジナル小説〜幻想入りシリーズ〜

2011年11月24日23時54分発行